

トロツコ

芥川 竜之介



トロツコ

芥川龍之介

小田原熱海間あたみに、軽便鉄道敷設ふせつの工事が始まったのは、良平りようへいの八つの年だった。良平は毎日村外はすれへ、その工事を見物に行つた。工事を——といったところが、唯ただトロツコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロツコの上には土工が二人、土を積んだ後うしろに佇たたずんでいる。トロツコは山を下くだるのだから、人手を借りずに走つて来る。煽あおるように車台が動いたり、土工の袷天はんでんの裾すそがひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺ながめながら、土工になりたいと思う事がある。

る。せめては一度でも土工と一しよに、トロツコへ乗りたいと思う事もある。トロツコは村外れの平地へ来ると、自然と其処そこに止まってしまふ。と同時に土工たちは、身軽にトロツコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロツコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

或夕方ある、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロツコの置いてある村外れへ行つた。トロツコは泥だらけになつたまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外ほかは何処どこを見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端はしにあるトロツコを押した。トロツコは三人の力が揃そろうと、

突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、――トロツコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行つた。

その内にかれこれ十間程来ると、線路の勾配が急になり出した。トロツコも三人の力では、いくら押しても動かなくなった。どうかすれば車と一しよに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロツコの上へ飛び乗った。トロツコは最初徐ろに、それから見る見る勢よく、一息に線路を下り出した。

その途端につき当りの風景は、忽ち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮の風、足の下に躍るトロツコの動揺、——良平は殆ど有頂天になった。

しかしトロツコは二三分の後、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押すじゃあ」

良平は年下の二人と一しよに、又トロツコを押し上げにかかった。

が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変った。

「この野郎！ 誰に断つてトロに触った？」

其処には古い印袷天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土

工が佇んでいる。——そう云う姿が目にはいった時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出していた。——それぎり良平は使の歸りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はつきりした記憶を残している。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記憶さえも、年毎に色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたつてから、良平は又たつた一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて来た。このトロッコを押しているのは、二人と

も若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いやすような気がした。「この人たちならば叱しかられない」——彼はそう思いながら、トロツコの側そばへ駈かけて行つた。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——縞しまのシャツを着ている男は、俯うつむ向きにトロツコを押したまま、思つた通り快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「わ・れ・は・中・中・力・が・あ・る・な」

他の一人、——耳みみに巻煙草まきたばこを挟はさんだ男も、こう良平を褒ほめてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好い」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙黙と車を押し続けていた。良平はどうこうこらえ切れずに、怯ず怯ずこんな事を尋ねて見た。

「何時までも押していて好い？」

「好いとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。

五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから」——良平はそ

んな事を考えながら、全身でトロツコを押すようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りくだになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直すぐに飛び乗った。トロツコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の勻においを煽あおりながら、ひたすべりに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっと好い」——良平は羽織に風を孕はらませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。

竹藪たけやぶのある所へ来ると、トロツコは静かに走るのを止やめた。三人は又前のように、重いトロツコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先上りの所所つまさきには、赤錆あかさびの線路も見えない程、落葉のた

まっている場所もあった。その路をやつと登り切ったら、今度は高い崖がけの向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「もう帰ってくれば好いい」——彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、勿論彼もちろんにもわかり切つていた。

その次に車の止まったのは、切崩きりくずした山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児ちのみごをおぶつた上かみさんを相手に、悠悠ゆうゆうと茶などを飲み始めた。良平は独りひといらいらし

ながら、トロツコのまわりをまわって見た。トロツコには頑丈な車台がんじょうの板に、跳ねかえった泥が乾かわいていた。

少時しばらくの後茶店のちを出て来しなに、巻煙草を耳に挟はさんだ男は、（その時はもう挟んでいなかったが）トロツコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子だか子をくれた。良平は冷淡に「難有ありがとう」と云った。が、直すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついていた。

三人はトロツコを押しながら緩い傾斜ゆるを登って行つた。良平は車に手をかけていても、心は外の事ほかを考えていた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があつた。土工たち

がその中へはいった後、^{あと}良平はトロツコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかった。トロツコの車輪を蹴^けって見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木^{まくらぎ}に手をかけながら、無造作^{むぞうさ}に彼にこう云った。

「わ・れ・はもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」
「あんまり帰りが遅くなるとわ・れ・の家^{うち}でも心配するず・ら・」

良平は一瞬間^{あつけ}呆気にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮

母と岩村まで来たが、今日の途はみちその三四倍ある事、それを今から
たった一人、歩いて帰らなければならない事、——そう云う事が一時
にわかつたのである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕
方がないと思つた。泣いている場合ではないとも思つた。彼は若い二
人の土工に、取つて附けたような御時宜おじぎをすると、どんどん線路伝い
に走り出した。

良平は少時しばらく無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懷ふところの菓子包
みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側みちばたへ抛ほり出す次手ついで
に、板草履いたぞうりも其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋たびの裏へじか
に小石が食いこんだが、足だけは遙はるかに軽くなった。彼は左に海を感
じながら、急な坂路さかみちを駈かけ登つた。時時涙がこみ上げて来ると、自然

に顔が歪ゆがんで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山ひがねやまの空も、もう火照りほてが消えかかっていた。良平は、愈氣いよいよが氣でなかった。往きと返りかえと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡ぬれ通ったのが氣になったから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織みちばたを路側へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助ければ——」良平はそう思いながら、迂すべつてもつまずいても走って行った。

やつと遠い夕闇ゆうやみの中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思い

に泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。

彼の村へはいつて見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯氣ゆげの立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲くんでいる女衆おんなしゅうや、畑から帰つて来る男衆おとこしゅうは、良平が喘あえぎ喘あえぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口うちかどぐちへ駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかつた。その泣き声は彼の周囲まわりへ、一時に父や母を集まらせた。殊ことに母は何とか云いながら、良平の体を抱かかえるように

した。が、良平は手足をもがきながら、啜^{すす}り上げ啜^{すす}り上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く^{わけ}訣を尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、……………

良平は二十六の年、妻子^{さいし}と一しよに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆^{しゅふで}を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵^{じんろう}勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。……………

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
